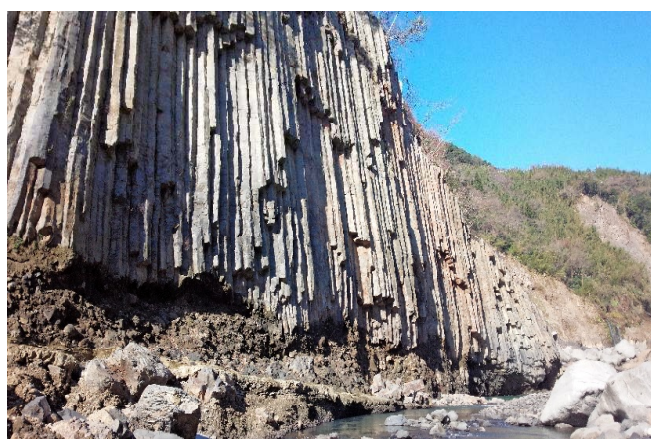




立野峡谷のジオパーク資産 国土交通省の工事で破壊



黒川対岸から見た破壊前の柱状節理 2015.12.19



長陽大橋から見た破壊後の柱状節理 2017.8.30

国連教育科学文化機関（ユネスコ）の「世界ジオパーク」に指定されている立野峡谷で、阿蘇火山の溶岩でできた「柱状節理」が国土交通省の工事で破壊されました。新阿蘇大橋の位置も工法も、一般の住民が知らないうちに決められましたが、位置や工法を決める段階で多方面の意見を求めているならば、柱状節理を破壊しない位置や工法が考えられたはずです。

破壊された柱状節理の約 1 km 下流の立野ダム本体予定地右岸には、さらに貴重な柱状節理が存在します。ここでは、立野溶岩が柱状に縦に割れた柱状節理と、板状に横に割れた板状節理が 5～8 層交互に堆積しており、立野溶岩が何度にも分かれて流れてきたことが良く分かります。立野ダム本体工事が始まればこの柱状節理も、幅 200 m、高さ 90 m、厚さ最大 40 m にわたって削られ、永久にダム本体のコンクリートに飲み込まれます。

これらの柱状節理は、阿蘇の成り立ちを知ることのできる学術的にも貴重な、後世に残すべき地質遺産です。その景観は、地元にとっても貴重な観光資源となりえるものです。国土交通省と熊本県は、立野峡谷が世界ジオパークの貴重なジオサイトであることを認識していなかったとしか言いようがありません。国交省と熊本県に対し、今回の柱状節理の破壊に強く抗議するとともに、見解を問う公開質問状を 9 月 27 日に提出しました。

世界ジオパークは来年、阿蘇ジオパークの再認定を審査します。9 月 27 日に開かれた日本ジオパーク委員会では、保全や活用を進める地元協議会の組織運営に問題があるとして、改善するよう求めることを決めました。来年の世界ジオパークの再認定を確実にするためにも、国交省は立野ダム本体建設工事を一旦中止し、地元にしちんとした説明をすべきです。

●立野ダムをめぐる動き 2017年4月～2017年10月

- 2017年 6月 7日 全国公害総行動 国交省本省と立野ダム問題について交渉
- 6月 24日 南阿蘇村役場で立野ダム問題住民学習 40名参加
- 7月 8日 九州北部豪雨5周年「白川と球磨川の安全を考える」130名参加
- 7月 25日 国土交通省立野ダム工事事務所に公開質問状（その6）を提出
- 7月 29日 第1回「白川の復旧・復興対策の現地見学会」
- 8月 18日 白川流域首長や議員他に要請書と国交省への公開質問状（その6）を郵送
- 8月 19日 渡鹿地区で「白川の安全と立野ダムを考える集い」 40名参加
- 8月 24日 国土交通省立野ダム工事事務所に説明会開催などを求める要請書を提出
- 9月 3日 新社会党立野ダム予定地現地視察（岩中県議他14名）
- 9月 6日 熊本市青年会館（中央区出水）で立野ダム問題学習会 50名参加
- 9月 8日 南阿蘇自然守り隊が朝倉市の災害現地視察
- 9月 12日 渡鹿住民の会が国交省に要請書提出
- 9月 24日 柱状節理破壊に関し国交大臣に公開質問状を郵送
- 9月 27日 柱状節理破壊に関し熊本県に公開質問状を提出
- 9月 30日 北区龍田地区で「白川の安全と立野ダムを考えるつどい」 30名参加
- 10月 3日 住民有志33名が「立野ダム建設中断と公開住民説明会を求める要望書」を国、県、熊本市に提出

●九州北部豪雨5周年シンポ「白川と球磨川の安全を考える」



熊本市パレアにて 2017.7.8

九州北部豪雨5周年シンポジウム「白川と球磨川の安全を考える」を、7月8日に熊本市のパレアで開催しました。国土交通省で河川行政一筋に取り組まれてきた宮本博司さんをお招きし、約130名の参加で会場は満席となりました。

宮本さんは「ダムは想定外の自然現象にはもろい。堤防強化や洪水の一部を周辺の水田等に流す仕組みをつくるなど、流域全体で洪水を分散させるほうが効果的だ」などと講演。苦田ダムや長良川河口堰の所長、淀川河川事務所長、近畿地方整備局河川部長、本省河川局防災課

長などを歴任された宮本さんの体験に基づくお話には説得力があり、どのようにしてダムが計画され、造られていくのか。そしてどのようなおかしなことが起こっているのか、非常によく理解することができました。宮本さんの講演は、以下で見ることができます。<https://youtu.be/QyJ17V0Mf8U>

講演に先立ち、宮本さんには白川改修の状況や、立野ダム建設予定地を見ていただきました。兩岸のいたところが土砂崩壊を起こしている立野ダム予定地について「地盤の弱さを感じる」と指摘。「立野ダム建設を疑問視する役人もいるはずだ。世論の盛り上がりなどのきっかけさえあれば、役人も動く」と述べられました。



立野ダム予定地を視察する宮本氏

●流域のあちこちから「立野ダムの説明を」の声



渡鹿地区での住民集会 2017.8.19

国土交通省が立野ダム建設について全く説明しないことについて、疑問の声が広がっています。

8月19日に渡鹿公民館で開かれた「白川の安全と立野ダムを考える集い」には、約40人の地区住民が参加しました。元自治会長さんらが呼びかけ人となり、住民でいっぱいとなった会場では、立野ダム建設に関する疑問の声が相次ぎました。

立野ダム建設の「受益地」とされている渡鹿地区は、5年前の九州北部豪雨でも一部で浸水被害を受けました。しかしそれは、竜神橋の架け替えのために堤防が一部設置されていなかった箇所から水があふれたからです。その後改修が進んだことで、白川の流下能力は大幅に向上しています。9月12日に渡鹿住民の会は、国土交通省や熊本市、県に対し、立野ダムの住民説明会の開催などを求める要請書を提出しました。

その後9月6日には中央区出水（50名参加）で、9月30日には北区楠（30名参加）で同様の住民による集会が開かれました。

白川流域のあちこちから立野ダム建設への疑問や、国交省に説明責任を求める声が上がっています。「立野ダム本体工事の中止と説明責任を」「立野ダムよりも熊本地震からの生活再建、復旧・復興に税金を使え」との声をあげていきましょう。

●住民有志33名が立野ダム説明会を求める要望書を提出



市民有志による要望書提出 2017.10.3

10月3日には、住民有志33名が「立野ダム建設中断と公開住民説明会を求める要望書」を国土交通省熊本河川国道事務所、熊本県、熊本市に提出しました。

有志の皆さんが、暮らしと政治を学ぶ勉強会で、熊本地震後も進む立野ダム建設に疑問を持ち、自分たちの率直な気持ちを訴えたいと要望書をまとめました。立野ダムの3つの放流孔が流木や土砂でふさがったらどうなるのかなど、5つの疑問点を上げ、住民と国がやり取りできる公開の場での説明会開催を求めました。

以下、提出に参加された方の感想から。

「上に報告します」「上に図ります」とだけ言い続けた国土交通省の対応でした。「回答することが出来ない」というお答えでもいいから電話をしてほしいと願った私たちの言葉も「上に図ります」というお答えでした。全く何も回答しようとしらない国交省には驚きました。

熊本県は、国交省の代弁者のように対応されました。熊本県ではなく、国交省の技術の人と話をしているかのように感じました。

熊本市は、県とは少し異なる対応でしたが、「技術委員会で立野ダムの安全性が確認された」ことと「白川の河川改修と立野ダム建設はセットである」と、繰り返し述べておられました。ともあれ、それぞれの姿勢や立場がよく分かった一日でした。

立野ダム公開質問状（その6）を提出



6通目の公開質問状提出 2017.7.25

7月の朝倉市周辺での豪雨では多くの土砂崩れが発生し、流れてきた流木が支流の橋などに引っかかり、川をふさいで濁流があふれ、被害を拡大しました。立野ダムは、ダムの下部にゲートのない幅5mの穴（放流孔）が開いており、普段は水をためず、洪水時のみに水をためる治水専用ダムです。

5年前の九州北部豪雨で、阿蘇カルデラ内では400か所以上の土砂崩れが発生しました。集水面積383km²もの阿蘇カルデラ内の土砂災害で発生した流木は、全て立野を通り白川を流下します。想像を絶する量の流木や岩石、土砂などが流れ

下ったのですが、国交省はその量を全く把握していません。もしその時、立野ダムがあったのなら、幅5mしかなく、穴の上流がスクリーンでおおわれた立野ダムの穴はたちまち流木などでふさがり、洪水をため込むだけの非常に危険な状態になっていたのは明らかです。

国交省立野ダム工事事務所がホームページで6月30日に公表したCG動画「立野ダムの洪水調節」は、これまで住民が質問してきた点についての回答となっていません。また、これまでの同省の主張と食い違っている点もあり、7月25日に公開質問状を提出し、7月29日開催の「白川の復旧・復興対策の現地見学会」において文書で回答することを強く要請しました。

立野ダム「見学会」でも回答せず



第1回立野ダム見学会 2017.7.29

7月29日、国交省主催の「白川復旧・復興対策現地見学会」では、白川改修の4地点での見学の後、立野ダム建設予定地で説明がありました。私達住民が事前に提出していた公開質問状への回答は一切なく、その場での質問に対しても「ホームページを見るように」と繰り返すばかりで、驚きました。現場まで連れて行き、住民の質問には答えずに、一体何のための見学会なのでしょう。

参加者の「熊本地震で周囲の山があちこちで大きく崩れていてるのに、ダムを造って大丈夫なのか」との質問に対する「林野庁の管轄だ」との回答には驚きました。災害対策は、山と川を一体として考えるべきではないでしょうか。結局、「時間が押している」との理由で、質問は途中で打ち切られました。一体誰のための立野ダム建設なのでしょう。

編集後記 昨年夏に国土交通省が設置した技術委員会は、わずか3回の会合で、同省の「立野ダム建設は技術的に可能」との見解をそのまま認めてしまいました。国交省が選んだ7名の委員は、熊本とは縁もゆかりもない方ばかりで、国交省から天下った人もいます。国交省が選んだ委員が、国交省の見解に異議を唱えるわけがありません。しかし、国交省は技術委員会の見解を「錦の御旗」に立野ダム建設を推し進め、残念なことに熊本県も熊本市もその「錦の御旗」にモノを申せない状況なのです。国交省は、「住民に知らせない、住民の声を聞かない、住民の疑問に答えない」という姿勢を改めるべきです。このような現状を多くの人に知ってもらうためにも、10月28日の集会に是非ご参加ください。(N.O.)